

5. 大学院における ESP 教育の試み ー経営学専攻学生を対象とした英語による「ビジネス戦略」の授業報告ー

古谷千里¹、玉木欽也²

はじめに

ESP では、専門英語を教えるのは英語教育担当教官(以後、「英語教官」と略す)か、専門科目担当教官(以後、「専門教官」と略す)か、という未解決の課題がある。英語教官には専門領域の知識がないので、専門の内容を英語で教えることは無理だ、という考えがある。一方、専門教官が行っている(英語の)外書講読等などの授業は、英語の授業ではなく翻訳作業をしているのであり、それだけでは国際的に通用する専門英語力は養成されないのではないかという考えがある。専門領域の英語力(以後専門英語力と略す)の教育をめぐる、二つの考えの間に大きなギャップがある。そのギャップの大小は、領域によって異なるであろうが、どの領域にも存在している。しかも、国際共同授業や国際共同研究プロジェクトが急増している今日では、このギャップを埋め、日本人が人類共同の活動に自信をもって参加できるようにしたいものである。

専門英語教育は、英語教官か専門教官のどちらが教えるかを決めることではなく、専門教官や英語教官がそれぞれ単独に出来ることは何で、できない事は何であるかを明らかにすること。そして両者の協働を可能にするにはどのようにしたらよいかを具体的に明らかにすることではないだろうか。

本プロジェクトでは、この問題の解決に挑戦してみる要因がいくつか揃ったため、経営学における専門英語教育の授業を試みた。本書はその実施報告である。議論の一資料としていただければ幸いである。

1. 授業の概要

1.1 実験授業の背景

情報化の進展はビジネスのグローバル化を急速に進めており、英語によるコミュニケーション力はビジネスの生き残り要因の一つとして重要度を増している。大学の経営学部や経済学部の教育においては、仕事に使える英語力³の養成が緊急課題となっている。しかし、実際には経済学や経営学専攻の学部学生は、実社会体験やビジネス体験が少なく、また、大学キャンパスにおいてビジネス実践に密着した英語コミュニケーション力の教育を行うことは容易ではない。

このような状況において実験授業を可能にするいくつかの要因が整ったため、各方面の協力を得て、「生産情報システム演習 2」(2002 年度)において実験授業を行った。以下にその要因を記す。

(1) ビジネス体験をもつ学生

青山学院大学大学院経営学部博士前期課程「生産情報システム演習 2」(2002 年度)の受講者の 50%がビジネス体験をもつ社会人学生あるいは実社会体験者であること。また、受講者全員が学部レベルの経営学を履修している。さらに、教育基盤であるサイバーキャンパスシステム⁴(以後、CCS と略す)に精通しているため、授業のフィードバックが容易に得られる。

(2) コミュニケーションに理解をもつ専門教官

(3) ビジネス体験をもつ ESP 教官

(4) 英語による経営学のシミュレーション教材

主要教材、STRATEGY COPILOT⁵(CD-ROM)はアニメーションを駆使したシミュレーション教材であり、具体例に基いて理論を学ぶことができる。また、この教材には日本語版の解説書『マッキンゼーから生まれた MBA 世界最強の戦略思考』があり、副教材として使用できる。また、CD-ROM 教材は高価である上に、ネットワーク対応になっておらず学生人数分を購入することは極めて困難であったが、販売元(株)のグローバルワークプレイス日本支部のご協力により実験授業の期間、無償貸与⁷させていただいた。

2. 実験授業

実験授業は科目名「生産情報システム演習 2」において、英語科目としてではなく専門科目として行った。授業の概要は以下の通りである。

2.1 授業の目的

経営戦略に関する基本コンセプトの理解と応用。およびそれらに関する英語による理解力と表現力の養成。

2.2 教授者

経営学担当の教官と ESP 教育研究者によるチームティーチングで行った。シラバスの作成、教材の選定、スケジュール、質問への応答、成績評価などの協働でおこなった。担当作業の詳細はグラフ1に示す。

CCSを駆使しオンラインで多くの作業を行うため、テクニカルアシスタント(経営学部3年生)の援助を得た。

表 1: 英語教官と専門教官の共同作業

英語教官の作業	共同作業	専門教官の作業
専門英語力調査	Pre-test	経営に関する知識調査
協働	授業設計	協働
借用交渉	教材選定	借用契約者
WBT補助教材作成	副教材	妥当性チェック
英語による授業	授業	経営学についてのQ&A
英語の発音、ヒアリング方法	音声指導	
辞書の使用法、英文読解法など。	語彙、英文理解	
評価資料提出	評価	評価決定

2.3 学生のプロフィール

受講生は青山学院大学院経営学部博士課程前期生5名およびテクニカルアシスタント(*)の計6名。そのプロフィールは以下の通りである。調査は6名全員に対して行ったが、資料分析には学部学生(1名)のデータは含まれていない。

表 2: 学生のプロファイル

	学年	専攻	会社勤務体験	母語
1	M2	経営学	有	日本語
2	M2	経営学	有	日本語
3	M2	経営学	有	日本語
4	M1	経営学	無	日本語
5	M1	経営学	無	中国語
6	B3*	経営学	無	日本語

2. 4 スケジュール

授業は 2002 年 10 月 3 日より 12 月 19 日までの約 3 ヶ月間、週 1 回の間隔で 11 回行った。その間には、授業方法や教材内容の説明や調査テストが含まれる。この他、修士論文指導および学生によるコース評価等も行った。スケジュールの詳細は以下の通りである。

表 3: スケジュール

NO	date			準備を必要とする服教材およびITシステム
1	10.03	Introduction	Class planning, Overview of the Strategy COPILOT	questionnaire
2	10.1	基礎専門英語力チェック	発音、Listening, Vocab, writing, reading, etc.	Pre-testNeeds analysis of ESP
3	10.17	基礎専門知識チェック	経営戦略および経営管理に関する知識レベルと理解レベルのチェック	Pre-testNeeds analysis of business strategy
4	10.24	Textbook overview	教材の全体構成と個人担当部分の選択	
	10.31	修論指導		
5	11.07	Textbook review report	1 個人分担当分のレポート 2 List up unfamiliar words & expressions	BBS に学習成果の公開リスト作成
6	11.14	English Study skills	5.-2 への解決方法 (study skills)	Online dictionary, search engine, etc.
7	11.21	Theory / COPILOT 1		COPILOT on the web
8	11.28	Theory/ COPILOT 2		COPILOT on the web
9	12.05	Theory/ COPILOT 3		COPILOT on the web
10	12.12	Simulation		CD-ROM
11	12.19	Presentation	BBS上のPPT(学生制作)に基づき英語で学習成果を発表する	BBS
12	1.16	修論指導		
13	1.23	研究報告書作成		

2. 5 授業方法

専門英語力と英語による発表力が十分でない学生が 11 回(1回 90 分)の授業を通して、実際のビジネス戦略の例を用いて、ビジネス戦略の一つの概念を英語で説明できるようにすることを到達目標とした。3 つの段階に分けて指導を行った。(参照 図1:ESP 授業「ビジネス戦略」の流れ)

第一段階: 英語による主教材を理解する。

第二段階: 理解した概念をプレゼンテーションファイルを使って日本語または英語で発表する。

第三段階: 学習したビジネス戦略に適合する現実のビジネス例を見出し、その具体例を用いてビジネス戦略についてプレゼンテーションファイルを使って英語で説明する。

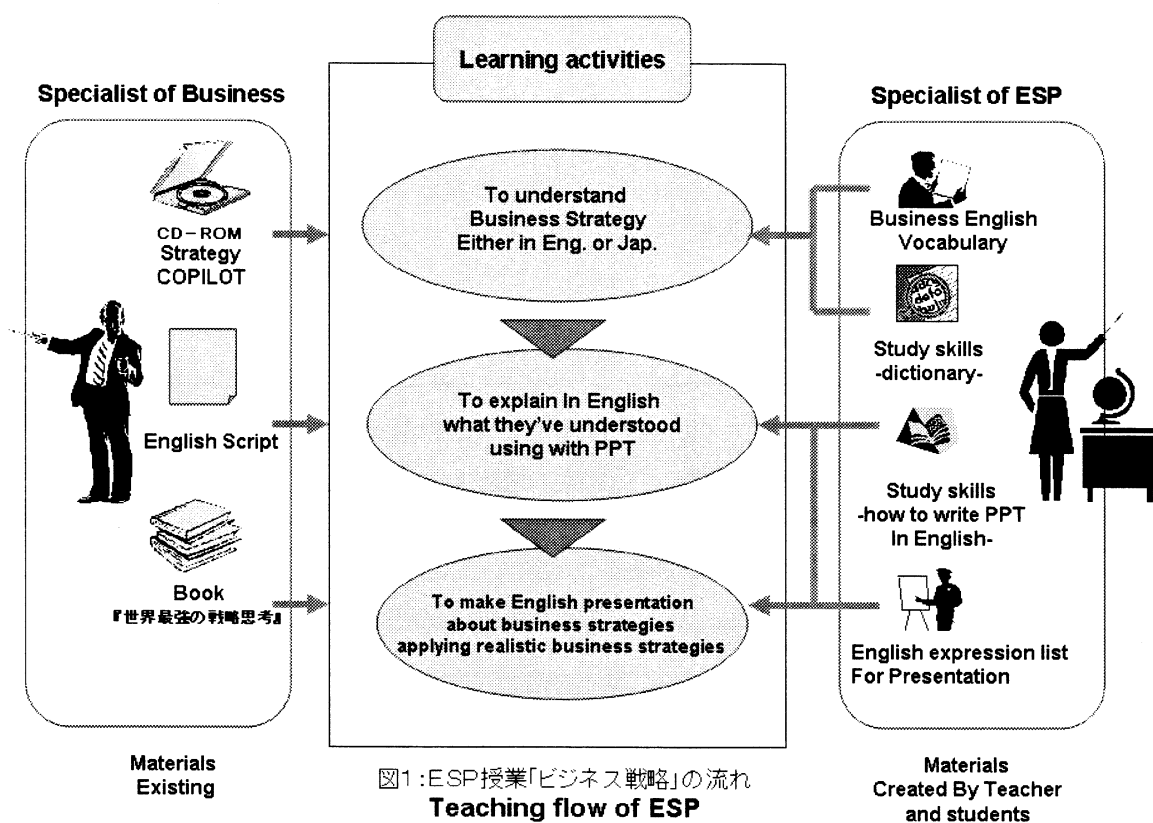


図1:ESP授業「ビジネス戦略」の流れ
Teaching flow of ESP

2. 6 教材

上記の学習活動を支援するために、主教材、副教材、教師作成の WBT 補助教材、および参考資料の4種類の教材を用意した。

(1) 主教材:CD-ROM 教材、STRATEGY COPILOT および STRATEGY

この教材を使用してビジネス戦略の理論と実際について学ぶ。マルチメディア教材のため、理論を理解するには英語のリスニング力が特に求められる。理解を助けるために、COPILOT のスクリプト(テキストファイル)を用意した。CD-ROM 教材の特徴は以下のような構成になっている。教材内容は多く、学習活動が多岐にわたっているので、この CD-ROM 教材を十分に活用するには相当数の時間がかかる。授業では学生が選択した1-2項目に限りて利用した。

- アニメーション(cartoon)を多用しており、理論がイメージ的に理解しやすい。
- プレゼンテーションフィル形式で理論の要約があり、後に学生がパワーポイントで発表するためのモデルとなっている。
- 練習問題、回答、解説がある。
- 3D キャラクターとの会話を通して問題解決力を養成する練習問題が組み込まれている。

(2) 副教材:書籍、インパルタ『マッキンゼーから生まれた MBA 世界最強の戦略思考』総合法令出版株式会社、2002 この書籍は上記 CD-ROM 教材の日本語版と解釈できる。これは CD-ROM の英語内容の確認、およびビジネス英語とビジネス日本語の対照等において、有用である。

(3) WBT補助教材

教官作成の WBT 教材

- ◇ Study Skills-Dictionary
- ◇ Study Skills-How to give a better presentation! Part A: Expressions
- ◇ Study Skills-How to Write TTP in English

学生作成の教材

- ◇ ビジネス英語の語彙リスト(Excel ファイル)

(4) 参考資料(CD-ROM 英英辞書、ジャーナル記事など)

2.7 教育環境

授業はゼミ室および CCS によるオンライン教育環境の両者を使用した。

(1)ゼミ室

教授者(2名)と学生の全員(6名)がネットワークに接続されたPCを使用しながら授業を行う。教材の提示、提出物などをPC上に開きながら対面授業をおこなった。

(2)サイバーキャンパスシステム

教官および学生は常時インターネットにより繋がっており、教師による教材の提示や学生の課題提出、さらに掲示板や Q&A によるコミュニケーションは時間に制限されずに、いつでも行える環境にある。CCS の主な機能は以下の通りである。

- 教育機能:シラバス提示、教材提示、課題の提出、テスト、アンケート、成績管理、など
- コミュニケーション機能:お知らせ、掲示板、質問、FAQ など

3. 成果および評価

3.1 専門英語力

授業開始時の英語力についてアンケート方式で調査した結果、受講者はビジネス英語に触れた経験が極めて少ない。経営学部の学生に期待される専門英語教育カリキュラム⁸に基づいて、彼らのビジネス英語に関する自己評価を行った。結果は以下の通りである。

表4:あなたの ESP 力ービジネス領域

Skills	English proficiency	YES (人数)	NO (人数)	平均点 (10点中)
読解力と語彙Level 1	ビジネス英語を語学教材で学習した経験。あなたのビジネス英語教科書の読書力	2	3	1.8
読解力と語彙Level 2	一般読者向けビジネス英語記事を読んだ経験。あなたの英語記事読解力	5	0	2.4
読解力と語彙Level 3	専門家向けビジネス英語資料を読んだ経験。あなたの専門英語資料読書力	4	1	2.2
オーラルコミュニケーション力	ビジネス会話経験あなたのビジネス英語力	1	4	0.4
オーラルプレゼンテーション(一方向)	ビジネスについてのオーラルプレゼンテーションの経験。あなたのビジネス プレゼンテーション力	0	5	0.4
オーラルプレゼンテーション(双方向)	ビジネス交渉やディベート経験。あなたのビジネス交渉力	0	5	0.2
ライティングLevel 1	e-mail でビジネス英語を書く経験。ビジネスe-mail ライティング力	2	3	1.2
ライティングLevel 2	ビジネス提案書や論文を書く経験。ビジネス提案や論文ライティング力	2	3	0.6
Cross-cultural Exchange Program	ビジネス海外研修、国際プロジェクト体験	0	5	

ビジネス英語体験としては、ビジネスに関する英文記事や専門資料を読解する経験をもっている者は多い。また、ライティング経験を持つものもいる。一方、オーラルコミュニケーションは、会話のレベルから交渉力にいたるまで経験者はほとんどいない。

また、これらの英語力に関する自己評価はどの項目も極めて低い。自己評価を確認するために、ビジネス英語に関する語彙と英文理解テストを行ったが、低い自己評価を証明する結果となった。

3.2 一般英語力

日本の大学では英語基礎力の低下が問題になっており、専門英語教育の発展の足かせの一つとなっている。『ITとESPアプローチによる専門英語教育ー大学教育カリキュラムに関する提案書ー』⁹の提案に基いて、英語基礎力の診断調査をおこなった。その結果は以下の通りである。

表 5：一般英語力診断

	Detailed Skills	評価(10点中)
IT基礎力	PC, Internetの利用	1.6
情報検索力	Internet による英語情報検索術	1.8
文法	中学、高校で学習した英文法	3.2
読解	新聞などの一般的話題の読解力	3.2
語彙	日常語彙	1.8
語法	一般的な慣用表現	1.6
ヒアリング	テレビや英語話者の日常的な会話を聞く	2
発音の基礎	単語や文章を外国人に伝わるように発音する	1.6
会話基礎	非日本語話者と日常的なことを話す	1.2

調査は自己評価により行った。受講者の実力からみて、大変謙虚な評価を下していると思われる。しかし、この表からも文法と読解が数的に高いが、他の項目は全体的に低い。特に、語彙、語法、発音基礎、会話基礎、そして情報検索力などが低い評価を下している。これらから、英語を日常的に使用することに、特に、自信を持っていないと解釈される。

3.3 音読スピード

本実験授業で使用する主教材では、講義を英語で聞き取りながら戦略理論を理解しその理解を口頭で発表することが最終目標である。発音や口頭発表技術が重要となる。従って授業には音声訓練を導入した。単語の発音、文の読み方、説得力のある話し方、発音付きの辞書の紹介などをおこなった。音読スピードを測ることによって発音の進捗状況を記録した。CD-ROM 教材の中の一説の音読速度を測定した。因みに音読箇所は毎回同じ箇所である。

表 6: 音読スピード

学生	Reading speed w.p.m. 第一回目	Reading speed w.p.m.第二回目	Reading speed w.p.m.第三回目
A	120	108	130
B	110	101	117
C	101	117	123
D	120	115	120
E	74	80	84
F	110	84	108

英語話者の話し言葉の平均速度は1分間当たり150語前後といわれている。音読速度が基準を超える者はいなかった。音声訓練の必要性が極めて高い。

4. 学生の評価と満足度

3に示した英語力調査から、この授業は学習者のレベルをかなり超えており、この授業設計が妥当かどうかについて不安があった。学生たちがこの授業をどのように評価し、学習の満足度がどの点にあったかについて、掲示板¹⁰に残されたコメントから探ってみた。

4.1 学生による評価

本プロジェクトの評価を学生からのフィードバックによってみたい。回答は、自由回答形式で行い、オンライン掲示板を使用した。意見は授業参加者全員に公開されている。代表的な意見をまとめると以下のとおりである。1)授業内容について、2)教材について、3)授業方法について、4)自己評価についてまとめた。

4.1.2 授業について

授業について、(1)経営学の観点から、(2)専門英語の観点から、(3)英語のプレゼンテーションの観点から、学生からの評価を得た。

(1) 経営学の観点から

- 事例やアニメーション漫画を使って説明しているため、わかり易かった。経営学の理論を実用化にするには、大変役に立つと思う。
- 経営学としては、非常に高度な内容だったと思うが、自分が担当した部分に関しては、とても知識が豊富になったと思う。「バリューチェーン」の部分を担当させて頂いたが、他の英文テキストを使用している授業で、たまたま同じ value chain に関する文献を読む機会があり、大変役立った。
- 経営学として全体的に学ぶには、もっと時間が必要であると思う。
- テキストに記載されているケーススタディが分かりづらかった。ケーススタディの説明のページは、イラスト中心となっており、あまり説明文が付加されていなかったためである。

(2) 専門英語の観点から

- 授業での英語は専門英語というよりはビジネス英語に近いのではないかと感じた。言い回しなどが非常に役に立った。
- 経営学の各用語の、英語での言い方を学ぶことができた。授業初期で作成した「重要用語リスト」をもっと活用できれば、もっとよかったと思う。
- 専門用語やフレーズを勉強することによって、プレゼンテーションする時に英語が話せるようになった。

(3) 英語のプレゼンテーションの観点から

- プレゼンとはどんなものか、その本質に触れることができたと感じた。
- プレゼンテーションの方法を身に付けてよかったです。
- 英語でプレゼンの機会は話には聞いていましたが、これほどエキサイトするとは思いませんでした。授業では本当に毎回ドキドキさせていただき、新鮮味があり、有用であり、感謝している。
- 私には、英語でのプレゼンテーションは、初めての経験であった。如何せん、日本語でのプレゼンテーションすらもうまくできないのに、それを英語で行うというのは、かなり困難な課題であった。しかし、英語でのプレゼンテーションのやり方、言い回し、礼儀などを教えていただき、とても勉強になった。
- 英語でのプレゼンテーションの機会を与えていただいたことは、とてもいい経験になったと思う。

4. 1. 3 教材について

授業で使用した教材について、(1)CD-ROM、*Strategy COPILOT:Understanding Business Strategy*, (2)テキスト『世界最高の戦略思考』(3)Study Skills(教師作成のWBT教材)などの教材について、学生の評価は以下の通りである。

(1) CD-ROM、*Strategy COPILOT:Understanding Business Strategy*,

- 「英語＋アニメーション」でできており、かなり理解の助けになった。シミュレーションの部分も授業で扱えればよかったと思う。
- CD-ROMが経営学の概念を理解するには大変役に立ちました。時間があれば、シミュレーションもやってみたいと思います。
- CDとても価値があるものと思いましたが、2枚目や練習などまだチャレンジしていない部分が多く、もうお返ししないと行けないのかと少し残念です。

- 英語力がないため、教科書の日本語でアウトラインを理解したあとに使用すると理解が深まると感じた。
- 新しい単元を学び始めた頃は、「英語＋アニメーション」が非常に役に立つものの、繰り返し聴いて行くうちに、「英語だけで充分」なレベルに辿り着く。そうなった場合、この CD-ROM の場合は、パソコンを立ち上げないと英語を聴くことができない。このことが、さらなる英語学習の障害になると思う。
- 教科書の後の理解を深めるために役に立った。エクササイズが特に役にたった。
- お互いに、自分の担当箇所を発表することで、全体として、学習の効率化が図れたと思う。(自分で全てを予習せずとも、多くの単元を学習できた。)しかし、経営学全体として、あのテキスト全体を学習するのは、かなり困難であるように思う。

(2) テキスト『世界最高の戦略思考』

- 簡潔にまとまっていてわかりやすい。
- テキストは内容的に専門的であり、学生よりもビジネスマンに関心をもたせる構成ではないかと思いました。
- 図や絵などが非常にわかり易くてよかった。
- テキストに記載されているケーススタディが分かりづらかった。ケーススタディの説明のページは、イラスト中心となっており、あまり説明文が付加されていなかったためである。
- 訳は原文より難しいではないかと思いました。CD-ROM のように、もっとわかり易く訳したらよいではないかと思いました。
- できれば、節(或は章)ごとに、CD-ROM で紹介した時に使われた専門用語やフレーズをまとめていただきたい。

(3) 補助教材について

- 補助教材としては、①教師作成の WBT 教材、Study Skills シリーズ、②CD-ROM の英語スクリプトが用意された。その効能については以下のような意見が寄せられた。
- CD-ROM の英語スクリプト、プレゼンテーション用補助教材等、これらの存在が私の場合、学習する上でかなりのウエイトを占めていた。これらの教材は、共に不可欠であったと思う。やはり、テキスト・CD-ROM 以外に、担当教員が必要な教材を提供することが求められると思う。
- 補助教材がないと最後の英語のプレゼンテーションはうまくできないと私は思います。
- それらの Skills はこの授業だけでなく今後の勉強や仕事にも役に立つと思います。
- 重要単語リストは役に立った。

4.1.4 授業方法について

6 名による少人数制、サイバーキャンパスシステムの利用、学習する箇所を学生が選ぶ自主選択方式などに対して以下のような意見を得た。

- 学生の語学力に応じて、授業方法を決めたことが非常によかった。
- 小人数であるのはよかった。ちなみに通常のレクチャーは 100 程度、ゼミは 20~30 人程度。
- 私自身、ウエイトはやはり英語 60%でした。始めてでもあり、CDを聞くだけでも時間がかかり、テキストの内容を勉強する(きっと私たちレベルでは、内容の事例を調べ

ていって始めて理論的に理解できるのかも)には、ポイントの絞り方が絞りきれない部分がありました。

- テキストの内容が非常に専門的のため、その内容をもっと話し合ったり、研究したりして、理解を深める部分がもう少しあってもよかったかと思いました(時間的には難しいかった)。
- 少人数で授業を行うのは緊張感が高まり非常によかった。
- 討論などを盛り込めばもっと緊張感が高まってよかったかもしれない。
- 少人数であるため、非常によかった。各人が、毎週、発言の機会を求められ、そのことが理解を深める助けになった。大学院の授業であっても、なかなか、ディスカッションが進行していかない場合も多い。しかし、この授業では、ディスカッションが促進されたと思う。
- 授業は、やはり、はじめから英語でやってもよかったと思う。日本語ではじめてしまうと、英語へ移行する際、心理的に英語への抵抗感がぬぐえない。はじめから英語でやってしまえば、英語でのプレゼンテーションを行うことに対する抵抗感も少なかったかもしれない。
- 今回の授業は、あくまで、教室での授業としてはよかったものの、「cyber」な ESP には、なっていなかったように思う。今後、ネットワークを介した非同期協調学習に移行する場合には、教室内で行っていた議論を掲示板で行ったり、重要単語をメールで配信したりといったことが、必要であると思う。
- ネットを通じて、教材を配ったり、レポートを出したりすることは非常に便利だ。
- オンラインではあったけど、e ラーニングの利点である双方向形式ではなかった。
- この授業に対するモチベーションは、非常に高かった。毎週出される課題が、特に莫大な量の課題がでるわけでもなく、「自主性に任せて、時間があれば、どんどん自分で調べて学習していく」といったような、課題の与えられ方が、私には、高いモチベーションにつながった。

4. 1. 5 自己評価

学習者はこの授業を通してどのような能力が磨かれたかについて以下の評価を得た。

- 経営学を十分理解しているわけではありませんが、テキストはむしろビジネスマンに有効で、非常に専門的な内容であり、内容を理解したときにきっと戦略論を大きく身につけられるような内容かと思います。
- 英語でプレゼンテーションすることがどのようなものを認識することができ、また自分がいかにプレゼンテーションの能力が未熟がわかった。英語というもののだけでなく、人に説明するということの意味が理解できた。また、他人に説明する時はパワーポイントなどの有効性を確認することができた。
- 理論的には強いかもしれませんが、実用能力はまだ足りない。
- 英語でプレゼンする機会が得られた。
- 英語で発言、発表する機会がいかに少なかったか認識できた。
- 英語のプレゼンを通して、自信がついた。
- パワーポイントのスキルが付いた。
- 自分の英語力を何らかの形で測定する機会を得られた。

5. 考察

本プロジェクトを通して、3 つの観点から次のような発見があった。専門英語教育において、

1) 最も重要なことは何か、2) 英語教官にとって得意・不得意とする点は何か、3) 専門教官にとって得意・不得意とする点は何か、この3点に触れたい。

1) 最も重要なことは何か

ESP 教材というと、専門分野の語彙、表現、基本概念などからなるリストが作成されることが多い。しかし、語彙や基本的な表現を習得しただけでは、専門領域では何も仕事ができない。例えば、この実験授業において、ビジネス戦略に関する語彙を多数記憶したとしても戦略について語ることはできず、また現実のビジネス戦略を理解しそれを効果的に発表することも困難だ。言葉で表現する以前に、ビジネス戦略構想を抱くことが不可欠だ。アイデアや論理があって初めて、それらを表現するための道具としての言葉が必要になってくる。専門英語力の養成において最も重要な点は、専門分野における思考力ではないかという示唆をこの実験で得た。

2) 英語教官にとって得意・不得意とする点は何か

授業では、ビジネス概念を理解することに多くの時間を割いた。概念を明確に把握しないうちは、言語やイメージで明瞭に表現できないからだ。実はこのような指導が、ビジネスに素人の英語教官に最も難しかった。事実、学生は授業でもっと議論を深めたかったとコメントしているが、議論を深めるには、英語力よりも専門領域(今回はビジネス戦略)の知識が必要である。

これに対して、学生がビジネス戦略に対する構想を構築した場合には、その表現方法や、効果的なプレゼンテーション方法についてアドバイスすることが多々あった。そのいくつかを WBT 教材として自主開発したが、学生の評価も高く、効果的であった。

3) 専門教官にとって得意・不得意とする点は何か

本授業では専門英語の習得を前面に掲げたために、英語教官が主に授業を行った。このような状況では、専門教官がもっとも指導的な働きをしたのは、授業設計、教材の選定であった。教育内容「ビジネス戦略」の経営学における位置づけや、経営学専攻学生にとっての有効度や難易度に関する判断は、専門教官が行った。

これに対して、英語の辞書の利用法、音声指導、英語による PPT の書き方、効果的なオーラルプレゼンテーションの方法などについては、語学教官の知識を必要とした。

4) 協働のあり方について

本授業実践において英語教官と専門教官がどのような協働作業を行ったかについては表1に示したが、授業の設計において両者が協働することが最も今、求められていると考える。

また、この実験授業を通して、専門分野における英語コミュニケーション力を高めるには、「専門分野における思考力を鍛えること」ではないかという示唆を得た。もしこの観察が正しいならば、授業の主体は専門教官がリードし、語学教官はそのコミュニケーション部分を担当する方が効果的ではないかと考える。コミュニケーション力の養成を行うには、音声指導、プレゼンテーション指導を対面式で行うことが考えられるが、WBT 教材の作成などによって間接的に支援することも可能である。

これまで専門の授業と英語の授業は別々のカリキュラムで施行されてきたが、今後は両者を統合した授業設計も解決の一つとして考えられるのではないだろうか。

6. 結語

学生の英語力と本授業の到達目標との間には大きな距離があったにも拘わらず、学生の満足度が大きかったことが学生の授業に対する意見から窺われた。特に英語による口頭発表を課したことはインパクトが大きく、それをやり遂げた満足度はかなり大きかったことは幸いである。

しかし、実験に参加した学生の多くが、英語で発表する機会をこれまでほとんど持っていなかったことは、英語教育が大いに反省しなければならない点である。口頭発表に関していえば、単語の発音から、日常会話、さらに専門的な口頭発表にいたるまで、ほとんど経験していないことは、国際コミュニケーション時代に生きぬくには大きな課題を残しているといえる。

謝辞

本プロジェクトを実行するにあたって次の方々のご好意と協力にここに名前を記して感謝申しあげる。教材を無償貸与くださった、グローバルワークブレース日本支部 代表取締役 山中英嗣氏。そして実験授業に参加し、レベルの高い教材と到達目標に向かって全力で挑戦してくださった受講者の学生さんたち。青山学院大学大学院博士前期課程経営学専攻、大網千鶴、越山健彦、清水誠、白井賢一、董珊珊、本村憲一郎の各氏。ありがとうございました。

¹ 青山学院大学総合研究所客員研究員、サイバーESP 研究部会長

² 青山学院大学経営学部教授 「生産情報システム演習2」担当教官

³ 文部科学省は、『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想—英語力・国語力増進プラン—』を平成14年7月12日に発表した。

⁴ サイバーキャンパスシステム(株)日本ユニシス開発の学習管理システム。青山学院でいる。システムや機能等については、玉木、白井他「第3章 教育を支える学習管理システム(LMS)」『e ラーニング実践法—サイバーアライアンスの世界』pp.73-97, Ohmsha, 2003.2 を参照

⁵ Imparta, STRATEGY COPILOT Imparta Ltd. 2001

⁶ 『マッキンゼーから生まれた MBA 世界最強の戦略思考』総合法令出版株式会社、2002

⁷ 両者間で、プロジェクト提携基本契約書を交わした。

⁸ 古谷「表2 ESP アプローチによるカリキュラム—経営学部の場合」『ITとESPアプローチによる専門英語教育—大学教育カリキュラムに関する提案書—』青山学院総合研究所 特別プロジェクト 研究叢書 第一巻第一号 2002年3月 ISSN 1347-2127 p.29

⁹ 1.5 IT と ESP アプローチによる英語教育システムの全体像、pp.25-27

¹⁰ CCS システムにある機能の一つ。毎時間の授業後に、授業に関する感想を掲示板に書くことができる